

『世継物語』の和歌一覽

白石美鈴

『世継物語』所載説話全六十話（宇治大納言物語のみにある四話を含む）の内、説話中に和歌を含まない説話は、第二十一話・第二十三話・第二十六話・第二十八話・第二十九話・第三十話・第三十三話・第三十八話・第四十三話・第四十八話・第四十九話・第五十話・第五十一話・第五十二話・第五十三話・第五十五話・第五十八話である。残り四十二話は、和歌（和歌・連歌・漢詩）を含んだ話である。

各説話では、和歌の作者や詠歌事情を語り、いかに名歌であるか等を物語るとともに、和歌が各話の重要な核として話の展開機能を担っている。また世継物語所載和歌が他の多くの文献にあることも指摘できる。以上のことから、名歌とされる和歌と名歌の背景や誕生のいきさつを物語る説話が幾世紀に渡って連綿と流布し享受されている様相の一端がうかがえる。

本紀要第四十七号から第五十七号に掲載してきた『世継物語』注釈作業を通じて、他の日本文学の作品の中にも、同じ和歌が脈々と受け継がれている実態の一端に触れることができたが、注釈の中でその成果を十

分反映できなかつたので、今回一覽にすることとした。既に世継物語との共通話（一六話）を持つ古本説話集の歌については、中村義雄・小内一明両氏の御論考¹⁾がある。

凡例は以下の通りである。

一、本書に引用されている和歌（和歌・連歌）・漢詩に通し番号を付して立項した。

一、和歌（和歌・連歌）漢詩の表記は、本紀要の本文を用いた。

一、和歌・漢詩の一部の引用である場合は、〈 〉を付して立項して、和歌は下に全句を記した。

一、和歌・漢詩の下の（ ）の中の漢数字は、本書の説話番号、アラビア数字は、本紀要号数を示した。

一、同じ和歌の所在が確認できる文献名を記し、本文に移動がある部分のみを「」で示した。句の一部のみの引用の場合は「部分」とその旨を記した。

一、文献名は、歌集・歌論書・漢詩・物語・説話集・他と各おおむね成

立年代順を旨として掲げた。文献の引用は、歌集は、新編国歌大観、私家集大成、日本歌学大系、物語・他は、日本古典文学大系、新日本古典文学大系、謡曲大観、謡曲二百五十番集、古典文庫本、中世の文学（三弥井書店）など参照しやすいものを用いた。なお、和泉式部集は、私家集大成に依った。

1（春行き秋くれども年をも知らず）春住秋来 不_レ記_レ年_セ（一47）

白氏文集新楽府上陽白髮人

栄花物語上卷一三「春行き秋来たれども年もしらず」

2（残のともし火の壁を背ける影も心細く覚さるゝ）秋夜長 夜長無_レ

寐天不_レ明、耿耿_{タル}残燈背_ク壁_ニ影 蕭々_{タル}暗雨打_ツ窓_ヲ声（一47）

白氏文集新楽府上陽白髮人

和漢朗詠集上卷秋夜

林下集三五八上陽人

和泉式部日記 部分「よもすがらなにごとをかは思ひつる窓打つ雨の音を聞きつつ」

栄花物語上卷一三「残の燈火の壁に背ける影も心細うおぼさるゝ」

平家物語灌頂卷 部分「壁にそむる残の灯のかけかすかに夜もすがら窓うつくらき雨の音ぞさびしかりける」

宝物集卷二「物思へば壁にそむけるともし火のきえかへりてぞあかしかねつる」

唐物語第一五 部分「燈火をそむけ帳を隔てて」

謡曲善知鳥 部分「秋の夜長し夜な長ければ」

3（我身世に経る）花の色はうつりにけりないたずらにわが身世に経るながめせしまに（一47）

小町集

古今和歌集卷第二春歌下

三十六人集

三十六人撰（甲）

古三十六人歌合（戊）

古三十六歌僊秘談（庚）

俊成三十六人集合（古三十六人歌合）

近代秀歌

定家八代抄

定家十体

詠歌大概

色葉和難抄

西行上人談抄

万物部類倭歌抄 部分「初句なし」

三十六人撰（甲）

八代集秀歌

百人秀歌

百人一首

時代不同歌合

六華和歌集

宗尊親王三百首

井蛙抄

詞林采葉集

- 女房三十六人歌合（乙）
桐火桶
明日香井和歌集
練玉和歌抄
聴玉集 部分「上句なし」
内裏進上
水無瀬の玉藻
歌の大意
栄花物語上卷一三 部分「我身世に経る」のみ
- 4 いつこより春来たりけん見し人も絶えにし宿に梅ぞかほれる（二47）
栄花物語上卷一三 第四・第五句「絶えにし宿の梅ぞ句へる」
雑々集上一五 第二句「春や来にけん」、第七句「梅ぞにほへる」
- 5 過ぎにける年月何を思ひけん今しものもの歎かしきかな（二47）
万代和歌集卷一三恋五
続古今集卷一五恋五
栄花物語上卷一三
雑々集上一五
- 6 打とけて誰もまたぬぬ夢の世に人のつらさを見るぞ悲しき（二47）
万代和歌集卷第一三恋五
栄花物語上卷一三
宝物集（一卷本）
雑々集上一五
- 7 千歳へん程を知らねばこぬ人を待つは猶こそさひしかりけれ（二47）
栄花物語上卷一三 第二句「程も知らず」
雑々集上一五
- 8 恋しさも辛さともに知らせつる人をはいかうしと思はぬ（二47）
万代和歌集卷第一三恋五
栄花物語上卷一三
雑々集上一五 第五句「うしと思はん」
- 9 解くとだに見えずも有かな冬の夜の片敷き袖にむすぶ氷の（二47）
栄花物語上卷一三
雑々集上一五
- 10 逢ふ事の滞りつる程ふればとくれととくる気色たになし（二47）
栄花物語上卷一三 第二句「ととこほりつつ」
雑々集上一五
- 11 松風は色やみどりに吹つらん物思ふ人の身にぞしみける（二47）
後拾遺和歌集卷一七雑三
難後拾遺抄
万物部題倭歌抄
定家八代抄
栄花物語上卷一四
宝物集卷三 第三句「ふけつらん」
雑々集上一五 第五句「物思ふ袖の」

12 またましもかばかりこそはあらましか思ひもかけぬけふの夕暮 (二47)

和泉式部集 I

千載和歌集卷一四恋四 初句「待つとても」第五句「秋の夕暮」

和泉式部日記

古本説話集上六

雑々集上二

13 (人は草葉の露なれや) わが思ふ人は草葉の露なれやかくれば袖のま

づそほつらん (二47)

拾遺和歌集卷一二恋二

河海抄 薄雲

14 心みに雨もふらなん宿すきて空行月の影やとまると (二47)

和泉式部集 I 第三句「かとすきて」

和泉式部日記

古本説話集上六

15 あぢきなく雲居の月によそはれて影こそ出づれ心やは行く (二47)

和泉式部日記

古本説話集上六

雑々集上二

和歌威徳物語下五第二二歌の徳さまくある事

16 我故に月をながむと告つれば誠かと見に出でて来にけり (二47)

和泉式部日記

古本説話集上六

雑々集上二

17 ことわりやいかでか鹿の鳴かざらんこよひばかりの命と思へば (二47)

和泉式部集 III 第五句「いのちとおもひて」

和泉式部集 IV 第五句「命と思へば」

後拾遺和歌集卷一七雑三

古本説話集上六

曾我物語 (仮名) 卷五

謡曲橋弁慶 部分「今宵ばかりの名残なれば」

謡曲笛の巻 部分「今宵ばかりの名残なれば」

雑々集上二

和歌威徳物語下五第二二歌の徳さまくある事

和歌奇特物語 和泉しきふの事 第二・三句「なをもくらきにまよふへし」

18 物思へば沢の蛩も我身よりあくがれ出る魂かとぞ見る (二47)

和泉式部集 III・IV

後拾遺和歌集卷二〇雑六神祇

俊頼髓脳

和歌童蒙抄

保安二年関白内大臣忠通歌合 六番判詞 第二句「沢の蛩を」第四句

「あくがれにける」

袋草紙上巻

後六々選

万物部題倭歌抄

時代不同歌合一五〇番左

新歌仙

女房三十六人歌合

歌枕名寄

倭歌題材抄

九代抄

和歌呉竹集四

古今選三

金選集卷四ノ八

古本説話集上六

無名草子

十訓抄一〇ノ一三

古今著聞集卷五

沙石集卷五下 第二句「さはへの蛍」「さはの蛍」

三国伝記一ノ二七

御伽草子 四人比丘

御伽草子 鳥獣戯画歌合物語

謡曲鉄輪 部分「我は貴船の川瀬の蛍火」

謡曲玉葛 部分「あるひはこがるゝや。身よりいづる。玉とみるまで包

めども。蛍に乱れつる。」

東斎随筆詩歌類五 第四句「アクガレニケル」

女郎花物語下三五(写本)・下四六(万治四版)

雑々集上二

和歌威徳物語上二第九歌の徳にて神明種々利生の事

和歌徳一三三 第二句「さはへのほたる」

和歌奇特物語 和泉しきふの事 第四句「あくかれいてし」

19 奥山にたぎりて落つる瀧つ瀬の玉ちるばかり物な思ひそ(二四七)

和泉式部集IV

後拾遺和歌集卷第二十雑六第三句「滝つ瀬の」

俊頼髓脳上第三句「瀧津瀬の」、下第三句「たぎつ瀬に」

和歌童蒙抄

保安二年関白内大臣忠通歌合 六番判詞 部分「たまちるばかりものな

おもひそ」

袋草紙上卷

後六々選

万物部題倭歌抄

新歌仙

女房三十六人歌合

歌枕名寄

六華集

倭歌題材抄

九代抄

歌林良材集

和歌呉竹集四一

古今選三

金選集卷四ノ八

古本説話集上六 第三句「滝つ瀬に」

無名草子 第三句「滝津瀬に」

十訓抄一〇ノ一三

古今著聞集卷五

沙石集卷五下

三国伝記一ノ二七

御伽草子 鳥獣戯画歌合物語

東斎隨筆詩歌類五

女郎花物語下三五(写本)・下四六(万治四版)

雑々集上二

和歌威徳物語上二第九歌の徳にて神明種々利生の事

和歌徳一三三

20と、めおきて誰を哀と思ふらん子はまさり子はまさらん(三47)

和泉式部集I 第四・五句「こはまさるらんこはまさりけり」

和泉式部集III・IV 第四・五句「こはまさりけり こはまさるらん」

後拾遺和歌集卷一〇哀傷 第四・五句「こはまさるらんこはまさりけり」

古来風体抄下 第四・五句「こはまさるらんこはまさりけり」

定家八代抄卷八哀傷歌 第四・五句「子はまさるらんこはまさりけり」

万物部類倭歌抄 第四・五句「こはまさるらんこはまさりけり」

了俊一子伝 第四・五句「子はまさるらん子はまさりけり」

落書露頭 第四・五句「子はまさるらん子はまさりけり」

九代抄

和泉式部日記 第五句「子はまさるらん」

栄花物語・衣の玉 第五句「子はまさるらん」

古本説話集上七 第五句「子はまさるらん」

宝物集(一卷本) 第四・五句「こはまさるらんこはまさりけり」

無名草子 初句「とめおきて」第四・五句「子はまさるらん子はまさりけり」

雑々集上三 第五句「こはまさるらん」

21暗きより暗き道にぞ入りぬべきはるかに照せ山の端の月(三47)

拾遺和歌集卷二〇哀傷

後十五番歌合二番右

麗花集卷一〇雑

和泉式部集I・III・IV

玄々集

俊頼髓腦上 部分「はるかに照らせ山の端の月」

新撰朗詠集下雑

相撲立詩歌合四番右

和歌童蒙抄

保安二年関白内大臣忠通歌合・六番判詞

後六々選

袋草紙上 部分「はるかに照らせ山の端の月」

古来風体抄 初選本 再選本第三句「入りにける」

長名無名抄 部分「はるかにてらせ」

定家八代抄卷十

西行上人談抄

時代不同歌合一四九番左

女房三十六人歌合 第三句「入りにける」

愚問賢注 部分「はるかに照らせ山のはの月」

近來風体抄 部分「はるかにてらせ」

和歌講談 部分「はるかに照らせ山の端の月」
九代抄

聞書全集 部分「はるかにてらせ」

和歌呉竹集

古本説話集上七

宝物集（七卷本・元禄本）卷三

無名草子

沙石集卷五下

発心集卷六

三國伝記卷八ノ二一

御伽草子 いづみしきぶ 第二・三・四句「くらき闇路に生れきてさや
かに」

御伽草子和泉式部縁起 第三句「入りぬべき」

月刈藻集下

雑々集上四

和歌威徳物語下二第二一歌の徳さまくある事

和歌奇特物語

謡曲鶴第三句「入りける」

謡曲和泉式部

謡曲俊寛 部分「闇き道にぞ入りにける」

22 ひるは蝉よるは蛍に身をなして鳴暮しても燃えあかす哉（四47）

定頼集 I

定頼集 II 第二句「よるは蛍と」

古本説話集八 第四・五句「鳴き暮らしては燃えや明かさん」

雑々集上五 第四・五句「鳴くらしてはもえあかすかな」

23 はるく〜と野中に見ゆる忘れ水たえまくをなげく比かな（四47）

後拾遺和歌集卷一三恋三

定家八代抄

万物部類倭歌抄

色葉和難抄卷三

古本説話集上八

無名草子

雑々集上五 第五句「なげく比にも」

24 〈ながき思ひは〉蟋蟀いたくななきそ秋の夜の長き思ひは我ぞまさされる

白氏文集新樂府上陽白髮人

文選・詠懷詩一七首「開秋兆涼氣 蟋蟀鳴牀帷 感物懷殷憂悄悄」

経国集・良岑安世・賦秋可哀

古今和歌集卷四秋歌上

古今六帖卷六

和漢朗詠集上卷秋

後六々撰

桐火桶

古本説話集上八 部分「ななき思ひそ」

撰集抄卷八

栄雅抄 部分「秋の夜の長き明し難きもの思ひは我こそ勝れと言ふ」

25 よそにても見るに心は慰さまで立こそまされ賀茂の河浪（四47）

古本説話集上八

無名草子

雑々集上五

26 恋しさを忍びもあへぬ空蟬のうつし心もなく成にけり (四47)

後拾遺和歌集卷一四恋四 第二句「忍びもあへず」

定家八代抄

万物部類倭歌抄恋 第二句「忍びもあへず」 1332

古本説話集上八 第二句「忍びもあえぬ」

無名草子 第二句「忍びもあへず」

雑々集上五

27 身を捨てて心もなきに成にしをいかでとまれる思ひ成らん (四47)

古本説話集上八 第二句「忍びもあえぬ」

雑々集上五 第四句「わかでとまれる」

28 世をかへて心みれども山の端に盡きせぬ物は恋にぞ有ける (四47)

古本説話集上八

雑々集上五第三句「山の端トイの」

29 いにしへの奈良の都の八重桜けふ九重に匂ひぬるかな (五47)

後十五番歌合八番左

玄々集一五九

伊勢大輔集 I・II・III

金葉和歌集三奏本卷一春

相撲立詩歌合十二番右二三

新撰朗詠集下雜禁中四八四

後十五番歌合八番右一六

詞花和歌集卷一春

袋草紙上卷

後六々選

定家八代抄

清輔雜談集

詞華集註

古来風体抄下

日吉社選歌合雜三九番右

御裳濯和歌集

八代集秀歌

新勅撰和歌集

百人秀歌

百人一首

万代和歌集

新時代不同歌合下三十六番左

歌枕名寄

女房三十六人歌合 (乙)

女房三十六人歌合 (丙)

女三十六人撰 (甲)

五十五番歌合後一五番の内八番左

九代抄

私玉抄卷一春之部五〇花 初句「古の」

- 初学考鑑 部分「けふ九重に匂ひぬる」
古今撰
- 金葉集卷四ノ二七 部分「奈良ノ都ノ八重桜」
古本説話集上八
- 今鏡みこたち第八はなのあるじ 部分「奈良の都をおもひこそやれ」
「八重桜秋の紅葉いかならん」
長門本平家物語
延慶本平家物語
源平盛衰記・第四十八
十訓抄一ノ一八 部分「けふ九重に」
雑々集上六
- 和歌奇特物語伊勢太輔の事
謡曲雲雀山 部分「奈良の都の八重桜咲きかへる道ぞめでたきく」
30 みるめこそあふみの海にかたからめ吹きだに通へ志賀の浦風（五47）
伊勢大輔集Ⅱ
伊勢大輔集Ⅰ 第二句「あふみのうみの」
伊勢大輔集Ⅲ 第二句「あふみのうみは」
後拾遺和歌集卷一三恋三
後六々選
五代集歌枕下
古来風体抄下
千五百番歌合一七・一二六八番判詞
万代和歌集
女房三十六人歌合
- 新時代不同歌合下
二八要抄
女房三十六人歌合（丙）一三番左
女三十六人撰（甲）
三十六人女歌仙（丁）
古今撰
古本説話集上八
無名草子
雑々集上六
- 31 君みればちりもくもらで万代のよはひをのみもます鏡哉（五47）
伊勢大輔集Ⅰ 第三句「ちとせをのみも」
伊勢大輔集Ⅱ 第二・三・四「ちりもつもらしよろつよに光をのみも」
後拾遺和歌集卷四恋三
古本説話集上九
雑々集上六
- 32 曇りなき鏡の光ますくもてらさむ影にかはらさらめや（五47）
伊勢大輔集Ⅰ・Ⅱ
後拾遺和歌集卷四賀
今鏡藤波下第六ます鏡 第五句「かくれざらめや」
古本説話集上九
雑々集上六 第五句「かはらましやは」

33 さか月のさやけき影の見えぬればちりのおそりはあらじとをしれ

(六47)

後拾遺和歌集卷二〇神祇 初句「さか月に」

俊頼髓腦 初句「さかづきに」

元永元年関白内大臣忠通歌合

袋草紙上巻 初句「さかづきに」

雑々集上一三 初句「さか月に」 第四句「ちりのおそれば」

34 祖父父孫祐親が三代までにいたゞきまつるすへら御神 (六47)

後拾遺和歌集卷二〇神祇 第三句「みよまでに」

俊頼髓腦 第三句「三代までに」

袋草紙上 第二・三句「すけちかみよまでに」

六華和歌集 第三句「三代までに」

35 故郷のたびねの夢に見えつるは思ひやすらん又と、はねば (七47)

新古今和歌集卷一〇羈旅歌 第四句「恨みやすらむ」

歌枕名寄

草庵集

練玉和歌抄

歌の大意 第四句「恨みやすらん」

大和物語一三四 第四句「うみやすらむ」

大鏡(宇多紀)

打聞集一七オ

宝物集卷四(四冊本・九冊本)

十訓抄六ノ九 第五句「またもとねば」

36 玉匣二とせあはぬ君が身をあけながらやはあはんと思ひし (八47)

公忠集 第五句「あらんとおもひし」

後撰和歌集卷一五雜一 第五句「あらむと思ひし」

三十人撰六番右

和漢朗詠集下巻將軍 第五句「あらむとおもひし」

三十六人撰(甲)九番左 第五句「あらんとおもひし」

古三十六人歌合(戊)九番左

古三十六人歌倦秘訣(康)第一六番右

俊頼髓腦 第五句「あらんとおもひし」

和歌童蒙抄 第五句「あらむと思ひし」

俊成三十六人歌合 第五句「あらむとおもひし」

定家八代抄 第五句「あらむと思ひし」

万物部類倭歌抄

大和物語四

37 白雲の九重に立つ嶺なれば大内山といふにぞありける (九47)

兼輔集Ⅰ・Ⅲ 第二・三句「こ、のへにしも立つるは」

兼輔集Ⅱ 第二・三句「こ、のへにしもたちいつる」 第五句「いへはな

りけり」

兼輔集Ⅳ 第五句「むへそありける」

詞華集註 第五句「イフニザリケル」

新勅撰和歌集卷一九雜四

歌枕名寄

五代勅撰集詞華集春部 第五句「イフニザリケル」

大和物語三五

- 古本説話集一〇
源氏物語奥入れ・葵第五句「むべもいひけり」
紫明抄 第五句「人もいひけり」
河海抄 第五句「人もいひけり」
38つ、めどもかくれぬ物は夏虫の身よりあまれる思ひ成けり（二〇47）
後選和歌集卷四夏
和漢朗詠集上卷夏
和歌童蒙抄
古来風体抄下
定家十体
近代秀歌
定家八代抄
瑩玉集
八代集秀歌
詠歌一体
後撰集正義
万物部類倭歌抄
五代勅撰集
倭歌題林抄
練玉和歌抄
私玉集
大和物語三五
今物語四
撰集抄卷二ノ一
- 十訓抄一〇ノ四〇
39世の中のおさき瀬にしも成行けば昨日の藤の花をこそ見れ（二一47）
古今和歌集頓阿序注 第二・三・四・五句「あさき瀬にのみなりゆくは
昨日の淵の花となればなり」
古今和歌集灌頂口伝 第二句「あさきせにのみ」
大和物語六一
十訓抄八ノ六
40君を思ひなま／＼し身を焼く時は煙おほかる物にぞ有ける（二二47）
続歌林良林集
大和物語六〇
41遠近の人めまれなる山里に家居せんとは思ひきや君（二三47）
後撰和歌集卷一六雑二
袋草紙上卷
大和物語五七
42見し人の忘のみ行山里に心ながくも来たる春かな（二四48）
後拾遺和歌集卷一七雑三 初句「見し人も」第三句「ふるさとに」
袋草紙 初句「見し人」第二句「わすれのみする」第三句「ふるさとに」
題林愚抄 初句「見し人も」第三句「ふるさとに」
栄花物語上卷三
宝物集卷八 初・二句「見し人もとはずなり行」
宝物集（久遠寺本・一卷本・元禄刊七卷本） 第二・三句「イハズナリ

ユクヤマヒトニ」

十訓抄六ノ一〇 初句「見し人も」第三句「ふるさとに」

古今著聞集一三

43 墨染の衣うき世の花盛折り忘れても折りてけるかな（二五48）

道信集

実方集

新古今和歌集卷八哀傷歌

定家十体

定家八代抄

時代不同歌合（甲） 一三三番左第四句「おも忘れても」

時代不同歌合（乙） 一三三番左第四句「をりわしれても」

中古三十六人歌合一三番左

三五記

練玉和歌抄 第四句「おも忘れても」

栄花物語上巻四

44 世中にあらましかばと思ふ人なきが多くも成にける哉（一六48）

拾遺抄卷一〇雑下 第四句「なきがおほくも」

為頼集 第四句「なきがおほくも」

拾遺和歌集卷第二十哀傷 第四句「なきがおほくも」

後葉集雜二

後十五番歌合三番左

和漢朗詠集下巻懷旧 第四句「なきはおほくも」

玄々集

公任集（二ヶ所に所載）

和歌色葉集 第四句「なきはおほくも」

定家八代抄

万物部類倭歌抄

後一五番歌合・三番右

九代抄

練玉和歌抄九

狭衣物語卷二下

栄花物語上巻四 第四句「なきはおほくも」

古本説話集三六 第四句「なきはおほくも」

宝物集卷四（九冊本）

撰集抄八 第四句「なきはおほくも」

源氏物語奥入・玉鬘 第四句「なきはおほくも」

紫明抄 第四句「なきはおほくも」

河海抄 第四句「なきはおほくも」

45 あるはなくなきは数そふ世中に哀いづれの日まで歎かん（二六48）

小町集 I

為頼集 第四・五句「あはれいつまでいきんとすらん」

小大君集 II 第四・五句「あはれいつまでいきんとすらむ」

続詞花和歌集卷一八雑下 第五句「いはんとすらん」

新古今和歌集卷八哀傷 第四・五句「あはれいつれの日までなげかん」

定家八代抄

新時代不同歌合六〇番左 第五句「あらむとすらむ」

古三十六歌僊秘談（庚） 一二番右

後葉和歌集雜二 第四・五句「あはれいつまであらむとすらん」

九代抄 第四・五句「あはれいつれの日までなげかん」

練玉和歌抄卷九雜歌

栄花物語上卷四 第五句「あらむとすらむ」

古本説話集三六 第四・五句「あはれいつまで経べき我身ぞ」

宝物集卷四 第四・五句「あはれいつまであらんとすらん」

河海抄

謡曲関寺小町

46 宵の間に君をしいのり置きつればまだ夜深くも覚ゆるかな (一七48)

源兼澄集二八

続詞花和歌集卷七賀

袋草紙上卷 第五句「おもほゆるかな」

和歌呉竹集

栄花物語上卷三

宝物集卷一 第二句「君をし祝ひ」第四・五句「まだ夜のふかき心地こそすれ」

47 わたつ海のおきにこがる、物みればあまの釣して帰るなりけり

(二八48)

籐六(輔相)集

枕草子一七五

48 薪こる事は昨日に尽きにしを今日斧の柄をこゝに朽たさん (一九48)

傳大納言母上集

拾遺抄卷一〇雜下 第四句「いざをののは」

拾遺和歌集卷二〇哀傷 第四句「いざをののは」

玄々集

奥義抄 第四・五句「いさ斧のえはこゝにくたさむ」

和歌色葉集 第四・五句「いさをのえはこゝにくたさむ」

万物部類倭歌抄 第四・五句「いざをのえはこゝにくたさん」

枕草子一八八

河海抄胡蝶 第四句「いまをののえは」・御法 第四句「いざをののは」

49 散りぬればくやしきものを大井河岸の山吹今盛りなり (二〇48)

夫木和歌集第六

新拾遺和歌集卷二春下 第五句「けふさかりなり」

難波江五下

大和物語一〇〇 第五句「けふさかりなり」

古本説話集一一

50 くやしくぞ後にあはんと契りける今日を限りといはましものを

(二〇48)

新古今和歌集卷八哀傷

定家八代抄

増纂伊勢物語抄

大和物語一〇一

古本説話集一一

宇治拾遺物語一四六

51 立ちのぼる煙につけて思ふかないつまた我を人のかく見ん (二二四八)

和泉式部集 I・III・IV

和泉式部集 II 第五句「人のかくせん」

後拾遺和歌集卷一〇哀傷

万物部類倭歌抄部分第五句目なし

高倉院升遐記部分

古本説話集上三七

古本説話集上一四 第三句「今日ぞ」

西山物語 部分

55 みな人の心うつろふ長月の菊に我さへすきぬべきかな (二七四八)

古本説話集上一四

56 夜もすがら契りしことを忘れずは恋ひん泪の色ぞゆかしき (三一四九)

後拾遺和歌集卷一〇哀傷

古来風体抄

定家八代抄

八代集秀歌

万物部類倭歌抄

百人秀歌

悦目抄

榮花物語上卷七

今昔物語集卷二四第四一話

宝物集 (一卷本)

無名草子

十訓抄一ノ一一 初句「よとともに」

発心集二二三

53 好き物を花のあたりに寄せざらば此常夏に根絶えましやは (二五四八)

仲文集 第四・五句「このとこなつもねたらましやは」

公任集

古本説話集上一三

54 山深き入相の鐘の声ごとに恋そ日比の数は知るらん (二七四八)

枕草子二二四 初句「山近き」第四句「こふるこころの」

57 求めてもかゝる蓮の露を置きて憂き夜に又は帰るものかは (三三一九)

清少納言集

千載和歌集卷一九釈教歌

枕草子三一

58 わたつ海に親をおし入れてこの主の益する見るぞ哀れ成りける

(三四49)

続詞花和歌集卷二〇戯咲

枕草子二八七 第二句「親おし入れて」

古本説話集上一五 第二句「親落し入れて」

答問雜稿卷二

定頼集 第三句「ねざめつつ」

後葉集卷第一七雜二

続詞花和歌集卷一七雜中 第三句「ね覚めつつ」

千載和歌集卷一七雜歌中 第三句「ねざめして」

高良玉重宮神秘書紙背和歌 第三句「ねざめして」

栄花物語下卷二七

59 曇りなく鏡と見ゆる池の面に写れる影の恥かしきかな (三五49)

栄花物語下卷一七 初・二句「曇りなき鏡と磨く」

64 まだ馴れぬみ山がくれに住みそむる谷の風はいかに吹くらん (三六49)

公任集
栄花物語下卷二七 第七句「いかゞ吹くらん」

60 かくばかりさやけく照れる夏の日に我頂きの雪ぞ消せぬ (三五49)

栄花物語下卷一七

65 谷風になれずといかに思ふらん心はやく住みにしものを (三六49)

後拾遺和歌集卷一七雜三 第二句「なれずといかゞ」

万物部類倭歌抄 第二句「なれずといかゞ」第三句「思心ははやく」

栄花物語下卷二七 第二句「馴れずといかゞ」

61 いにしへは思ひかけきや取りかはしかくきん物とのりの衣を (三六49)

公任集

千載和歌集卷一七雜歌中

栄花物語下卷二七

66 山里の嵐の寒きには木の本をこそ思ひやりつれ (三六49)

62 何事も契り交はして着るべきを君が衣にたち遅れける (三六49)

公任集初句「同じ事」

千載和歌集卷一七雜歌中 初句「同じ事」

栄花物語下卷二七 初句「おくれじと」

67 聞きしより牛に心をかけながらまたこそ越えね相坂の関 (三七49)

和泉式部集II
栄花物語下卷二五

古本説話集下五〇

63 故郷の板間の風に夢覚めて谷の風はいかに吹らん (三六49)

公任集 第三句「ね覚して」

68 思ひあらば葎の宿に寝もしなんひしき物には袖をしつゝも (三九50)

袖中抄

日吉社撰歌合寛喜四年

俊成卿女集

色葉和難抄卷九

万代和歌集

文保三年御百首

和歌無底抄第八

朗詠題詩歌

井蛙抄第二

倭歌題材抄

歌林良材集文章撰格上 部分「おもひあらば云々」

詞林拾葉

文章撰格（上） 部分「おもひあらば云々」

大和物語一六一

伊勢物語三

69 大原や小塩の山も今日こそは神代の事も思い出づらめ（三九50）

業平集

古今和歌集卷一七雑歌上 第三句「今日けしこそ」

古今和歌六帖第三山 第三句「けふしこそ」

五代集歌枕春上

梁塵秘抄神社歌

和歌初学抄

袖中抄 第三句「けふしこそ」

六百番陳状春中 第三句「けふしこそ」・冬中上全句同じ

古来風体抄

定家八代抄

頭注密勘抄

古三十六歌僊秘談（庚）

万物部類倭歌抄 部分「おほはらやをしほの山もけふこそは」

井蛙抄

古今集注 第五句「オモヒシルラメ」・部分「大原也小塩之山毛 オホ

ハラヤラシホノヤマモ今日等ケフラコソ己曾神代之事」・部分「緒思出良目」ヲオモヒイッラメ

練玉和歌抄卷五神祇

短歌撰格上 部分「大原やをしほの山」

大和物語一六一 第四句「かみよのことを」

伊勢物語七六

大鏡（陽成紀）

紫明抄

謡曲小塩 部分「大原や。小塩の山も今日こそは神代も思ひ。知られ

れ。神代も思ひ知られけれ。」・全句同じ

謡曲融 部分「大原や。小塩の山も今日こそは。御覧じ初つらぬ。」

70 忘草生ふる野辺とは見ゆらめど忍ぶなり後も頼まん（三九50）

業平集第三卷

4 系統本業平集（書陵部御所本） 第三句「なるらめど」

和歌童蒙抄 第三句「みるらめど」

袖中抄第一五 第三句「見るらめど」

和歌色葉集四一 第三句「みゆらめど」

千五百番歌合 一二八八番判詞第三句「みゆらめど」

頭注密勘抄

古今集注卷一三恋 部分「ミルラメドコハシニブナリノチモタノマ
ジ」・卷一五部分「ワスレグサオツルノベトハミユラメドコハシノブ」・

卷一五恋五部分「ナリノチモタノママ」

新統古今和歌集卷一四恋四 第三句「なるらめど」

大和物語一六二

伊勢物語一〇〇

71 紫野雲のかけても思ひきや春の霞になして見んとは (四〇50)

実方集

流布本系統実方集 (書陵部本) 第五句「ならむとは」

大斎院前の御集

後拾遺和歌集卷一六哀傷定家八代抄 第五句「なしはてんとは」

歌枕名寄

栄花物語上巻四

今昔物語集卷二四第四〇話

宝物集卷一第四句「春のかすみと」

72 おくれじと常の御幸は急ぎしを煙にそはぬ旅ぞ悲しき (四〇50)

後拾遺和歌集卷一哀傷 第五句「旅の悲しき」

古来風体抄 第五句「たびのかなしさ」

万物部類倭歌抄卷一〇哀傷 第五句「たびのかなしさ」

定家八代抄 第五句「たびのかなしさ」

栄花物語上巻四 第五句「旅ぞ悲しき」

今昔物語集卷二四第四〇話 第三句「いそぎしに」・第五句「たびの
かなしさ」

十訓抄六ノ九 第三「いそぎしに」・第五句「たびのかなしさ」

73 足引きの山あひの水はこほれるをいかなる紐の解くる成るらん

(四一50)

流布本清少納言集

実方集

後拾遺和歌集卷一九雜五 第二句「山井の水」

千載和歌集 第二句「やま井の水は」

歌枕名寄 第二句「山井の水は」

枕草子九〇 第二句「山井の水は」

74 うは氷あはに結べる紐なればかぎす日かげにゆるふばかりぞ (四一50)

流布本清少納言集 第五句「ゆるぶなるべし」

千載和歌集卷一六雜歌 第五句「ゆるぶばかりを」

枕草子九〇 第五句「ゆるぶばかりを」

75 唐衣花の袂に立ち替へよ我こそ春の色はたちつれ (四二50)

和泉式部集II

新古今和歌集卷一六雜歌上 第三句「ぬぎかへよ」

定家八代抄 第三句「ぬぎかへよ」

栄花物語上巻一五 第三句「ぬぎかへよ」

76 唐衣立ち替はりぬる世の中はいかでか花の色もきるべき (四二50)

新古今和歌集卷一六雜歌上 第三句「春のよに」・第五句「色を見る
べき」

定家八代抄 第三句「はるの夜に」・第五句「色もみるべき」 1216
栄花物語上巻一五 第五句「色も見るべき」

82 見し人のなく成行を聞まゝ、いとゞみ山ぞさびしかりける (四五五)
栄花物語下巻三〇

77 脱ぎ替へん事ぞ悲しき春の色を君が立ちける衣と思へば (四二五〇)
和泉式部集Ⅱ 第五句「心とおもへば」

83 消え残るかしらの雪を払ひつゝ、寂しき山を思ひやる哉 (四五五)
栄花物語下巻三〇

栄花物語上巻一五 第四句「君がたちける」富岡本栄花物語第五句「き
みかたちつる」

84 あまの原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出し月かも (四六五〇)

78 けふ暮てあすもありとな頼みぞとつき驚す鐘の声哉 (四四五〇)

古今和歌集卷九 霸旅歌
新撰和歌集卷三 別旅

栄花物語下巻一八

古今和歌六帖卷一

79 朝またき急ぎをきつる花なれと我より先に露ぞ置きける (四四五〇)

金玉集雜

栄花物語下巻一八 卷二 第二句「急ぎおりつる」

深窓秘抄雜

80 君がためつとめて花をおれとてや同じ心に露をきつらん (四四五〇)

和歌体十種
和漢朗詠集上巻月

栄花物語下巻一八 第五句「露も置きけん」

秀歌三十六人和歌
綺語抄

81 煙絶え雪降積もる鳥辺野は鶴の林の心地こそすれ (四五五〇)

俊頼髓腦

後拾遺和歌集 卷一〇 初句「薪尽き」

奥義抄

奥義抄 初句「たきぎつき」

和歌童蒙抄

和歌童蒙抄 初句「たきぎつき」

五代集歌枕卷一上

和歌色葉 初句「たきぎつき」

万葉集時代難事

歌枕名寄 初句「たきぎつき」

柿本人麻呂勸物

栄花物語下巻三〇 第二句「雪降りしきる」

古来風体抄

定家八代抄

- 西行上人談抄
顯注密勘抄
秀歌大体
百人秀歌
百人一首
歌枕名寄
井蛙抄
連珠合璧集 上一 部分
私玉抄卷三秋之部二七月
別本和漢兼作集
臆説刺言初句「青海原」
和歌吳竹集
古今撰
歌の大意
土佐日記 初句「春海原」
水鏡
江談抄卷三ノ三
今昔物語集卷二四第四五話
古本説話集上四五
宝物集（九冊本）卷三
撰集抄 部分
謡曲谷行 旅 部分「ふりさけみれば春日なる三笠の山をさし過ぎて」
謡曲野守 部分「天の原ふりさけ見ると詠めける三笠の山陰の月かも」
月刈藻集中
本朝語園
- 85わたの原八十嶋かけて漕出ぬ人には告げよあまの釣船（四七五）
古今和歌集卷九霸旅歌
新撰和歌集卷三 別旅并二〇首
新撰髓脳六
金玉集雜
深窓秘抄雜
和歌体十種
和漢朗詠集下卷行旅
和歌童蒙抄
顯秘抄
俊頼髓脳
袖中抄第一九
和歌色葉
古來風体抄
定家八代抄
定家十体
如願法師集 第三・四句「しるべせよはるかにかよふ」
顯注密勘抄
色葉和難集
八代集秀歌
時代不同歌合 一〇番左
遠島御歌合 六八番右第三「しるべせよ」第五句「おきの釣船」
百人秀歌
百人一首
万物部題倭歌抄卷九 八十島 部分「わたの原八十嶋かけて漕出でぬ」

別本和漢兼作集

弘安十年古今集歌注 部分「わたの原やそ島かけて」

古今集序注

古今集注

大江広貞注古今集注

井蛙抄

和歌題林抄

練玉和歌抄卷六覇旅

歌の大意

水鏡第三「人にはかたれよ」

今昔物語集卷二四第四五話

宝物集卷二

撰集抄八ノ五

雑々集上七

謡曲 野守 部分「天の原。ふりさけ見ると詠めける。三笠の山陰の月
かも」

謡曲 龍虎 部分「天の原。八十島かけて漕ぎ出づる。く船路の末も
不知火の」

伊勢物語注

86人知れず止みなましかば侘びつ、もなき名ぞとだに言はまし物を

(五四52)

古今和歌集卷一五恋五 第二句「たえなましかば」

新撰和歌集卷四恋雜并一六〇首

伊勢集Ⅰ 第二句「たえなましかば」第五句「いふへき物を」

伊勢集Ⅲ 第二句「たえなましかば」

古今和歌六帖 五

金玉集 第二句「たえなましかば」

深窓秘抄恋 第二句「たえなましかば」

三十六人撰 第二句「たえなましかば」

俊頼髓腦 第二・三句「たえなましかばなかくに」

二八要抄恋

大鏡

今昔物語集卷二四第四七話 第二句「絶えなましかば」

古本説話集上二九

雑々集上一四

87へに出て人を花す、きわれこそしたに思ひしか穂に出て人にむ
すばれにけり(五四52)

古今和歌集卷一五恋五

新撰和歌集四

伊勢集Ⅰ 第二・三句「我こそふかくたのみしか」第五句「むすばれに
けり」

伊勢集Ⅱ 第三句「たのみしか」

伊勢集Ⅲ 第二・三句「我こそふかくたのみしか」

古今和歌集六帖五 第三句「たのみしか」

顯注密勘抄

万物部題倭歌抄卷一五恋五 部分「花す、きわれこそしたに思ひしか穂
に出て人に」

毘沙門堂古今集注仮名序 部分「花すすきはにいだすべき事にもあら

ず…」

二八要抄恋

大鏡

今昔物語集卷二四第四七話

古本説話集上二九 部分「ほに出てて人に」

88物をこそ岩根の松の岩躑躅いはねばこそあれ恋しき物を（五六53）

古今和歌集卷一一恋一 初句第二句「思ひいづるときわの山の」

新撰和歌集卷四恋雜并一六〇首 初句第二句「おもひいづるときわの山の」

和漢朗詠集上卷春 躑躅 初句第二句「おもひいづるときわの山の」

俊頼髓腦 初句第二句「思ひいづるときわの山の」

綺語抄 初句第二句「おもひいづるときわの山の」

清輔古今和歌集勘物 初句第二句「思ひいづるときわの山の」

五代集歌枕 初句第二句「思ひいづるときわの山の」

教長注 初句第二句「思ひいづるときわの山の」

顯昭注 初句第二句「思ひいづるときわの山の」

顯注密勘 初句第二句「思ひいづるときわの山の」

定家八代抄 初句第二句「思ひいづるときわの山の」

詠歌大概 初句第二句「おもひいづるときわの山の」

寂恵本古今集勘物 初句第二句「思ひいづるときわの山の」

弘安集注 部分「思出づるときわの山の…」

古今和歌集注抄出初句第二句「思ひいづるときわの山の」

歌枕名寄 初句第二句「思ひいづるときわの山の」

和歌口伝抄 初句第二句「おもひいづるときわの山の」

大江広貞古今註 部分「思ひいづるときわの山の…」

大和物語一二四

今昔物語集卷二二第八話

十訓抄六ノ二三 初句・第二句「思ひ出づるときなの山の」

雑々集上一〇

本朝語園三八三

89昔せし我予言の悲しきはいかに契りし名残なりけん（五六53）

後撰和歌集卷一二恋二 第五句「名残なるらん」

清輔古今和歌集勘物 部分「ムカシセシワカ、ネコトノカナシキハ」

顯昭注 第五句「ナゴリナルラム」

古来風体抄 第五句「名残なるらん」

定家八代抄 第五句「名残なるらん」

古今和歌集注抄出 第五句「名残なるらん」

万物部類倭歌抄 第五句「名残なるらん」

時代不同歌合 四四番左第五句「名残なるらん」

古今和歌集灌頂（和歌口伝抄） 第五句「なごりなるらん」

大江広貞注古今註 第五句「名残なるらん」

古今集註乾本 第五句「名残なるらん」

八代集秀歌 第五句「名残なるらん」

練玉和歌抄 第五句「名残なるらん」

十訓抄六ノ二三 第五句「名残なるらん」

河海抄

雑々集上一〇

90 現にて誰契りけん定めなき夢路にたどる我は我かは (五六五)

後撰和歌集卷一二恋三 第四句「夢ちに迷ふ」

古来風体抄 第四句「夢路にまどふ」

顯昭注 第四句「ユメジニマドフ」

定家八代抄 第四句「夢路にまどふ」

古今集注 (天理本古今集注二首) 第四句「ゆめちにやどる」

十訓抄六ノ二三 第四句「夢ちとまどふ」

河海抄 第四句「夢ちにまどふ」

雑々集上一〇

91 都にも恋しき人のあまたあれば猶此度はいかんとぞ思ふ (五七五)

後拾遺和歌集卷一三恋三

俊頼髓脳初句「みやこには」

万物部類倭歌抄第三句「あまた^おあれば^か」

今昔物語集卷三一第二八話第二句「わびしき人」

宝物集卷七 初句「都には」第二句「わびしき人」第五句「ゆかんとぞ

思ふ」

十訓抄一ノ四五第二句「わびしき人」

体源抄二ノ下第二句「わびしき人」

92 (遣愛寺鐘歌枕聴 香炉峯雪撥簾看) (五九五)

白氏文集第一六

和漢朗詠集下卷 山家

枕草子二九九

悦目抄

93 (螢火乱飛) 螢火乱飛秋已近 (六〇五)

全唐詩卷一四元愼二〇夜坐

和漢朗詠集上卷夏 螢

三五記

私玉抄卷二夏之部位二二 螢

今物語四

十訓抄一ノ一五

東齋隨筆東二〇〇

94 (夕殿に螢飛んで) 夕殿螢飛思悄然 秋燈挑盡未能眠 (六〇五)

白氏文集第一二感傷四

和漢朗詠集下卷恋

玉台新詠 玉融の玉階怨「夕殿に珠簾下る 流螢飛びてまた息ふ 長夜

羅夜を経ふ 君を思ふことここに何ぞ極まれる」

悦目抄

源氏物語 幻

十訓抄

今物語四 「夕殿螢飛思悄然」

95 (隠れぬ物は夏虫の) つゝめどもかくれぬ物は夏虫の身よりあまれる

思ひ成りけり (六〇五)

第38番歌を参照

96 音もせてみさほにもゆる螢こそ鳴虫よりも哀れなりけれ (六〇五)

重之集 第二句「思ひにもゆる」

後拾遺和歌集卷三夏 第二句「思ひにもゆる」

新撰朗詠集上夏 蛩 第二句「思ひにもゆる」

悦目抄 第二句「思ひにもゆる」

題林愚抄 第二句「思ひにもゆる」

練玉和歌抄卷二夏歌 第二句「思ひにもゆる」

宝物集 第二句「思ひにもゆる」

今物語四

【注】

(1) 中村義雄・小内一明「古本説話集和歌所載文献一覧」(『群馬県立女子大学紀要国語国文学編』第一四号平成五年三月発行)。本稿をなすに当たり、参考にさせていただいた。ご教示いただいた文献に加え、当方の調査済みのものと新たにいくつかの文献名を追加して一覧に記した。